イザヤ書２５章６－１０節ａ

マルコによる福音書５章２１－４３節

「どん底からの救い」

＜はじめに＞

今朝は「説教代読」という形ではありますが、こうして宮崎中部教会で説教奉仕ができること、とても嬉しく思っています。

この教会は、私にとって大変思い出深い、特別な教会です。２０１１年の春に、夫と共にこの教会へ来ましたが、その時には既に、牧師になること、献身を決意していました。しかし献身の思いを固めてからも様々な迷いと戸惑いがあり、献身を諦めようと思ったこともあります。３年間、「自分は本当に『牧師』として主に召されているのだろうか…」と問い続けました。しかしその中で、御言葉に生かされ、御言葉に慰められ、御言葉によって大胆に変えられてゆく皆さんの姿が、私のこの頼りない召命感を、いつも後押ししてきました。「教会は御言葉によって立つ」。そのことを身をもって実感した、そんな３年間でした。

また伝道者となってからも、御言葉に熱心に耳を傾けてくださった、皆さんの「御言葉に聞く姿」が、私の伝道者生活の原点になっています。

そのような教会で、こうして再び説教の務めが与えられましたこと、心から主なる神様に感謝をいたします。今朝も共に、主の言葉に聞いていきましょう。

＜ヤイロに共感する私たち＞

さて今朝は、大変長い箇所を読んでいただきました。ここには「２つの物語」が、一緒に語られています。１つは、２１節から２４節前半までと、３５節から４３節の「会堂長ヤイロの物語」です。そして、そのヤイロの物語に挟まれるようにして「主イエスの服に触れる女性の物語」が、ここで語られています。今朝は時間も限られていますので「会堂長ヤイロの物語」に的を絞って、御言葉に聞いていきたいと思います。

さて、ここに登場する「会堂長ヤイロ」は、湖のほとりにおられた主イエスの足もとにひれ伏して、「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう」と、しきりに願いました。この「会堂長」というのは、当時のユダヤ社会では「名誉ある務め」として見られていました。ヤイロはその会堂長の１人です。そういう彼が、今、会堂長としての名誉を捨てて、「娘を助けてほしい」と、１人の父親として主イエスにひれ伏しているのです。

ここから分かるのは、彼がこの娘のためにどれほど必死になっていたか、どれほど焦っていたかということです。確かに最近は、子どもへの虐待が増え続けています。しかし「親」というのは本来、こういうヤイロのような行動を取るものだと思います。「子ども

のためなら、自分の名誉や地位などどうなっても良い。代われるものなら、この自分が、いくらでも代わってあげたい」と考えます。私たちはこのヤイロの姿に、共感するものがあるのではないでしょうか？

＜言葉を発さないヤイロ＞

　このヤイロの求めに応じて、主イエスは出発されました。ただし、ここでとても興味深いのですが、この後、主イエスとヤイロは言葉を交わしていません。と言いますか、ヤイロのほうが、一言も言葉を発していないのです。

　例えば、ヤイロが自分の家に主イエスを案内する時です。おそらく彼はこの時、家を出る時に見た娘の姿を思い出していたのではないかと思います。そして心の中で、「すぐに先生をお連れして戻って来るから、あと少し、あと少しだけ頑張ってくれ…」、そう念じながら歩いていたのかもしれません。おそらく娘のことで、頭や心がいっぱいいっぱいだったでしょう。主イエスのことも、視界に入っていなかったと思います。無駄話をしている暇など、彼には少しもなかったからです。

　これは私たちにもよく分かります。自分や家族の問題、悩みで、頭や心がいっぱいいっぱいになってしまう時、他のことが一切手につかなくなってしまうということが、私たちにもよくあります。他にも、「自分は今仕事や家庭で問題を抱えていて、礼拝に行っている暇などありません」という言葉を私たちはよく耳にしますし、また私たち自身が、そういう言葉を口にすることもあります。そのようにして私たちは、主イエスに助けを求めながら、でもひたすら自分の殻に閉じこもってしまうということが、現実にあるのです。そういう時私たちは、主イエスの語りかけが聞けません。また、たとえ主イエスが私たちの目の前におられても、頭も心もいっぱいいっぱいになってしまって主イエスが見えなくなってしまうという時が、私たちにはあるのです。

　他にも、主イエスが御自身の服に触れた女性を探し始めて、その女性と語り出した時も、ヤイロは一言も言葉を発していません。もし私であれば、「こっちは急いでいるんです！娘が死にそうなんです！」と言いたくなります。でももしかするとヤイロは、ここで何も「言わなかった」のではなくて、何も「言えなくなった」のかもしれません。なぜなら、主イエスの服に触れた女性は３３節で、「すべてをありのまま話した」とあります。おそらく彼女は、「自分は『１２年間』、出血が止まらなかった者です…」と、話し始めたのでしょう。その話を傍で聞いていたヤイロは、何も「言えなくなってしまった」のだと、私は思います。それは彼の娘が「１２歳」だったからです。４２節にこうあります。４２節。「少女はすぐに起き上がって、歩きだした。もう十二歳になっていたからである」。彼の娘が生きてきた年月と同じだけ、目の前の女性は苦しんできたのです。もちろ

ん「死ぬか生きるか」に比べれば、ヤイロの娘のほうが大変です。でも彼は「１２年」というのを聞いた時に、自分の娘と目の前の女性を重ね合わせたのかもしれませんし、同情と共に焦る気持ちが入り混じったような、そういうとても複雑な心境だったと思います。

　これも私たちにはよく分かることです。私たちも、気持ちや時間など自分に余裕がある時には、相手に同情できます。他の人の喜びを、一緒に喜ぶこともできます。しかし余裕がなくなれば、相手の気持ちに寄り添うことなどできません。子育てもそうです。介護もそうです。ですからヤイロがここで黙ってしまったのも、私たちは分かる気がいたします。

　でも同時に彼は、主イエスがこの女性を癒されたのを見て、「自分の娘もきっと、このお方に癒していただけるに違いない」と、少しの期待も持ったかもしれません。しかし、です。続く３５節にこうあります。３５節。「イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。『お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう』」。あともう少し、あと一歩のところで、彼の娘は死んでしまいました。ヤイロがここでも一言も言葉を発していないのは、人々の「もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」という言葉が、彼自身の心にもよぎったからでしょう。「娘はもう死んでしまった。主イエスの救いの御手は間に合わなかった。もうおしまいである」。おそらく彼はそう考えたのだと思います。

＜死の知らせを聞き流す、無視する主イエス＞

　私たちも、「どうして主イエスはここで、あと一歩のところで間に合わなかったのだろうか？」と思います。間に合わなかったと言いますか、「どうして主イエスは、死にそうなヤイロの娘のほうに優先して向かわれなかったのだろうか？」と思うのです。

　この思いは、ヤイロの抱いた思い、また人々の言った「もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」という思いに、実は通じるものです。それは、「主イエスのお働きというのは、私たちが生きている時に『だけ』関わることであって、それ以上のものではない」という考えです。彼らは、主イエスのお働きが今生きている時に「だけ」関わるものだと考えて、娘が死んでしまったら「もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」と言いました。実は私たちも彼らと同じように考えてしまって、「どうして主イエスは、ヤイロの娘を癒すために、先を急がなかったのだろうか？」と、この物語が腑に落ちないのです。こういう、「病気を始めとした私たちの生活の色々な困難を、どれだけ解決してくれるか」ということ、また「今生きている間、神様が、自分の人生をどれだけ良いものにしてくれるか」という考えを、「現世御利益（げんせごりやく）」と言います。

　けれども主イエスは、そういう現世御利益的なものを与えるために、この世に来られた

わけではありません。もしも主イエスが、そういうものをお与えになるお方として来られたのであれば、主イエスはここで、娘の死に間に合わなければならなかったのです。間に合わずに死なせてしまったのであれば、現世御利益を与えるお方としては失格です。しかし主イエスは、主イエスがお与えになる救いというのは、生きている時に「だけ」関わる現世御利益というような、そんなちっぽけなものではありません。主イエスはもっと大きな、もっと別の救いを与える救い主として、この世に来られたのです。ですから主イエスは、人々に「もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」と言われても、ヤイロの家に向かって歩みを進められたのです。特に３６節には、「イエスはその話をそばで聞いて、『恐れることはない。ただ信じなさい』と会堂長に言われた」とあります。この「そばで聞いて」というのは、別の訳では「聞き流して」と訳されています。「無視して」と訳されているものもあります。つまり主イエスはここで、「娘は死んだ」という知らせをいわばどうでも良いものとして「聞き流して」、「無視して」、娘のもとへと歩みを進められたのです。それは、死という圧倒的な力の前で、「もう、先生を煩わすには及ばない。娘は死んでしまった。主イエスの救いの御手は間に合わなかった。もうおしまいである」と、人生のどん底に突き落とされたヤイロをそのどん底から、死の恐れから救い出すため、御自身の与える本当の救いを体験させるために、主イエスはあえて「娘は死んだ」という知らせを聞き流して、無視して、なおその歩みを進められたのです。

＜死は眠りに過ぎないものに＞

主イエスがヤイロの家に入っていかれると、そこでは人々が泣いていました。それを御覧になられた主イエスは、「子供は死んだのではない。眠っているのだ」と言われます。もちろんこれは、死という現実に主イエスが目を塞いでおられる、ということではありません。娘は本当に「死んだ」のです。ではどうして主イエスがここで、「眠っているのだ」と言われたのかと言いますと、それは、主イエスが「起こす」ことによって、再び「目を覚ます」から、主イエスにおいては「眠っている」のです。

主イエスは実際、その言葉を実現されます。主は娘のいる部屋に入り、その手を取って、娘を甦らせました。まるで深い眠りから目覚めたように、娘はすぐに起き上がり、そして歩き出します。まさに主イエスは御自身の言葉によって、娘を死から命へと呼び出されたのです。

この、娘の甦りの出来事は、主イエス・キリストの十字架の死と復活によって実現した救いの恵みを、まさに指し示しています。主イエスは、神様の独り子であられながら人となられ、私たちの生きる悩みや苦しみを知ってくださり、そして御自ら、その死の痛みや苦しみを十字架の上で味わい尽くしてくださいました。神様に見捨てられ、絶望のどん底にまで突き落とされた人と同じ所にまで、主イエスは来てくださったのです。そして御自

身、十字架にお架かりになり死んでくださることによって、私たちを恐れさせ、「死んでしまったらもうおしまいだ。神様の救いの御手は、そこにまでは及ばない」と絶望させる死を、御自身の身に全て引き受けてくださったのです。しかも、そこで終わりではありません。父なる神様は、その死の力さえも打ち破って主イエスを復活させてくださり、私たちを死の支配から、絶望のどん底から、解放してくださったのです。

この神様のおかげで、主イエス・キリストのおかげで、私たちの死はもはや眠りに過ぎないものとなりました。こういう救いをこれから実現しようとしておられるお方が、ヤイロが押し黙って歩いている時も、また、余裕がなくなって他者の喜びを素直に味わえない時も、死のどん底で言葉を失ってしまっている時も、主はヤイロと共にいてくださったのです。

私たちは毎月、聖餐に与っています。この聖餐の食卓において私たちは、私たちの痛みや苦しみを知っていてくださり、また寄り添ってくださるお方が確かにおられることを、この目で見て、この手で触れて、この舌で味わって、まさにこの体全体で、主が共にいてくださる幸いを私たちは味わい、そして心に刻みつけているのです。

＜ただ信じなさい＞

私は礼拝のたびごとに、「次もまた、同じ兄弟姉妹たちと共に礼拝を守れるだろうか」と考えることがあります。「この中の誰かは、欠けてしまうのではないか」と、心によぎることがあります。それは、高齢の方々ばかりの話ではありません。「この私自身が、欠けてしまう１人なのかもしれない」と思うのです。こんな話をすると、「縁起でもない」と言われるかもしれません。あるいは、「先生は若いから大丈夫」と、慰めの言葉をかけてくださるかもしれません。でも私たちの地上の生活は、誰もが保障されたものではないはずです。この礼拝堂を出た直後にどうなるかが分からない、そう言っても間違いではありません。もしかすると、ヤイロに娘の死の知らせが届いたように、私たちにも、絶望だと思わずにはいられない、人生のどん底だとしか思えないことが起こりえるかもしれません。信じられないほどの悲しみに、放り込まれてしまうかもしれません。

しかしそこでなお主イエスは、「恐れることはない。ただ信じなさい」と言われるのです。それは、主イエスがひとたび、私たちと「共に」歩み出してくださっているならば、死の力、絶望の力が私たちを支配するということは、もう二度とないからです。主イエスは今朝も御言葉をとおして、私たちとこうして出会ってくださり、私たちの手を取って、こう告げておられます。「恐れることはない。あなたを脅かしている死は、私の救いの恵みの前では、それは『眠り』に過ぎない。だから私はあなたに言う。死の恐れの中から、絶望のどん底の中から、起き上がりなさい」。祈りをいたしましょう。

イザヤ書２５章６－１０節ａ

マルコによる福音書５章２１－４３節

＜祈祷＞

教会の頭にています、主イエス・キリストの父なる御神様。

御言葉に感謝をいたします。

私たちはヤイロと同じように、様々な苦しみや悲しみ、試練の只中で言葉を失い、そして、あなたが見えなくなってしまう者です。しかしあなたは、そのような私たちの弱さを、御子をとおしてよく御存知のお方です。そしてそのような私たちを見捨てることなく、私たちの傍に寄り添い、私たちと共に歩み、「恐れることはない。ただ信じなさい」と、何度も告げてくださいます。感謝をいたします。どうか私たち、主イエス・キリストをとおして実現したあなたのまことの救いに、私たちの信仰の目と耳と心とを向けてゆくことができますように。

主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン